令和５年度第２回社会教育委員会議録

■日　時　令和５年１１月２８日（火）
　　午前１０時から正午まで
■場　所　徳島県庁１０階　大会議室
■出席者　徳島県社会教育委員：９名
　　馬場委員長、赤松委員、石倉委員、泉委員、伊藤委員、榎本委員、
　　蟹江委員、横田委員、横畠委員
　　教育次長、生涯学習課長、生涯学習支援課長、事務局他：７名
■会議概要

１　　開　会
２　　徳島県教育委員会挨拶（教育次長）
３　　議事
　（１）「令和５年度地域教育支援活動奨励賞」最終選考
　（２）今期社会教育委員会議提言テーマについて
　（３）今後のスケジュールについて
　（４）その他

議事（２）今期社会教育委員会議提言テーマについて

馬場委員長　議題２について協議をお願いしたい。徳島県社会教育委員会議の提言については、第１回会議において、これまでの提言策定のスケジュールを変更し、１期２年から２期４年をかけて審議し、とりまとめることとした。丁寧に時間をかけながら、徳島の社会教育の中期的なビジョンを検討していきたいと思う。今期の社会教育委員の皆様には、２年間の任期中に徳島県の社会教育委員会議の提言のテーマ設定を行っていただくこととなる。皆様には、今の社会教育について思うことや、日頃の活動を通して考えていることについて忌憚のない御意見をいただき、次期提言の柱になる部分を協議していきたい。

他の都道府県でも提言を出してはいるが、なかなか実行に移すのが難しい。徳島県の場合も、これまで提言を出してきているが、予算が確保され具体の施策になっていくのは簡単なことではない。もちろん、財源がなくともできる事はあるが、４～５年先の徳島の未来像をしっかりと示していくためにも非常に大事な職務だと考えている。日頃、皆様が地域で活動されていることは、委員個人としての活動だが、この会議では、徳島の社会教育の方向性を示す提言をまとめるという視点から、提言に盛り込むべき内容等、それぞれの御意見を述べていただきたい。

第３５次社会教育委員会議による提言は、令和５年４月に教育長に提出しているので、その提言についての感想または、国の動きや徳島県の社会教育全般の動きを視野に入れながら御発言をお願いしたい。

今、学校教育では、地域学校協働活動とコミュニティ・スクールの一体的な

推進について力を注いでいる。このことについて、文部科学省は、数年後には、地域学校教育活動とコミュニティ・スクールを一体化して、全ての学校区への配置が実現するよう去年よりも増額して予算要求している。

子供達の教育活動の支援を通じて、学校も地域も元気になっていくというWin－Winの関係を作っていくことをめざしている。

また、国は「ウェルビーイング」という点にかなり注力している。障がいの有無に関わらず、誰一人取り残さないという方向性を打ち出し、前向きに取り組んでいこうとしている。

以前、私が山口のセミナーに参加した時のことを少し話させていただきたい。一人の生徒が、高校の総合的な探求の時間の学びの発表で、地域の人たちの力を借りながら「同性婚を法律的に認めていこう」というテーマの研究発表であった。現在、社会問題であるセクシャリティの問題を取り上げ、多様な考え方を認めていこうということが非常に興味深かった。

徳島の社会教育が、継続的に発展させていくべき取組や、逆に、このようなところが遅れているといった御意見を出していただきたい。加えて、私は社会教育委員個人として今後、取り組んでみたいこと等、盛り込んで欲しいということなど幅広く、御意見をいただきたいと思っている。

赤松委員　今日、文部科学省が、全国のコミュニティ・スクールの導入率を情報解禁した。本年度５月時点、全国３万４，６８７校の内の１万８，１３５校がコミュニティ・スクールになっている。前年度から２，９００校余りが増加しており、着実にコミュニティ・スクールが増えている。徳島県は、自治体の導入率が１００％、学校の導入率についても。教育委員会を始め皆さんの御助力の成果で、徳島県は令和２年度にグッと伸びて、自治体としてはコミュニティ・スクール導入１００％となっている。私は CS マイスターとして文部科学省から任務をいただいており、非常に関心を持っている。やはり導入率がグッと伸びたことは、数字だけを見ると喜ばしいのだが、中身の方はどうかという課題が見えてくる。コミュニティ・スクールの中で何が話し合われ、どのような活動がされているのかということについては、もっと中身を検討して進めていかなければならないと思う。私自身、一緒に進めていけるよう尽力したいと思っている。

本年度に出された提言を拝見して、非常によく出来ていて分かりやすい提言だという感想を持っている。「ひとづくり・つながりづくり・地域づくり」という３つの柱を立てている。「『ひとづくり』が基盤となって、人と人がつながって、それが最終的には地域づくりにつながっていく」という考え方は、シンプルでわかりやすく、そこに力を入れていくべきだと思う。

では、それを進めていくためにどのようなことをしていけばいいのか。やはり、社会教育を進めていくうえで社会教育のための施設の充実というところは非常に大きいと思う。特に、この提言の中では、地域の大人の方が生涯学び続けるという意味で、公民館等の社会教育施設を充実させることが、すごく重要なことだと感じる。施設面を充実させることも大事だが、コーディネートする

人を配置し、どうすれば環境をうまく活用できるかという視点が非常に重要だと思う。教育次長さんの最初の挨拶の中でも御紹介いただいたコーディネーターの養成講座に、私も少し関わらせていただいた。人材育成の講座があり、そこで学んだ人達が、社会教育施設等の場で力を発揮するという、循環する仕組みを整えていくことが非常に有効だろうと思う。生涯学習課では、人材育成のための研修や講座を実施しており、図書館サポーターの養成、親なびゲーターの養成等に、私も楽しく参加させていただいている。様々な学びを修得した方々が活躍する場があるというのは重要であると思う。例えば、親なびゲーターの講座を修了された方が、実際に各学校等に行き、ファシリテーターとしてワークショップを運営していた。受講したから OK ではなく、実践を重ねながら親なびゲーターの方々が力を付けていく、皆がレベルアップしていく仕組みが整えられているところが素晴らしいと思った。

もう１つ、非常に大きな関心を持っているが不登校の問題。報道によると２９万人にのぼる子供達が学校に行けずに、社会的支援を受けていない状況にあるという。大変な事だと思う。地域や国を担っていく、未来将来を担っていく子供達が学ぶ機会を得られていないということは、社会の中の大きな課題である。学校や教育関係だけでなく社会全体で受け止めて解決を図っていかなければいけない大きな課題である。そういう課題に社会教育という立場から何か貢献できることがあればいいと思うし、先程のコミュニティ・スクールのように、地域とともにある学校づくりをしていく中で、子供達の支援を進めていきたいと今考えているところである。

馬場委員長　非常に重要な御意見。徳島県の社会教育施設は充実しているとは、言い難いところがある。また今後、新たな施設を作るのは予算的に、どの自治体も非常に難しい。公民館等も老朽化して廃止になっていく現状の中で、そういう場をどうやって確保していくのかが非常に大事だと思う。

徳島市は、公民館はまだ残っているが、残念ながらコミュニティセンターとダブルの条例になっている。現実的にどのような教育活動が行われているのか調査に向かったことがある。残念ながら熱心な取組とは言えない状況も見られた。そのようなケースばかりではないと思うが、教育施設だから、そこには必ず、子供から高齢者までの学習支援をする人材がきちんといなければいけない。このように、人材の配置等の課題をどうやって進めていくのかが行政として大きな課題だと思っている。今、国は社会教育士と言って社会教育主事のような資質・能力を持った人材を養成している。社会教育主事は、法律的に教育委員会の事務局にしか置けない（発令できない）ことになっているので、社会教育主事のような資質・能力を持った人が、各所で地域の人々を育てていくような環境が出てくればいいと思う。人材育成は徳島県も取り組んでいるが、学んだ人の活躍の場の創出が大事である。例えば、統廃合された学校等を使いながら、学びを生かした活動ができないものだろうか。

また、コミュニティ・スクールと地域学校協働活動が一体化しているところには、不登校の子も預かっているという事例もある。このような取組も今後、

非常に重要になってくる。加えて、不登校の子も成長し大人になっていくわけだが、社会福祉だけで、このような人達を支援するのは非常に難しい問題だ。小さいうちからそういう人々に目を向けるようなシステムがあるといいと思う。

石倉委員　私は地域での活動もしているが、県婦人団体連合会の代表として参加をしているので、団体の活動等も含めて発言させていただきたいと思う。まず、婦人会では地域と結びついた活動を主にしている。６月には結核予防会の理事長である尾身茂さんに御講演をいただき、そのお話を地域に持ち帰り伝達したり、複十字という結核予防のための募金活動も行ったりしている。また、戦争体験を語り継ぐという会を催しており、これは各地域の婦人会が持ち回りで実施している。本年度は徳島市が中心となって企画した。徳島中学校の２・３年生に、戦争体験の聞き取りや関連施設を巡った体験についての発表を行ってもらったほか、「平和を語り継ぐ紙芝居」等を参加者にも見ていただいた。このような活動を各地域持ち回りで実施しているので、何年かに１度は地域で語り継ぐ会が行われている。

それから、３世代交流芸能大会も開催している。本年度は県内３２の婦人会が参加した。男性や地域の子供達も含めた発表会の形式をとっている。「婦人問題調査研究発表大会」では、「フェーズフリーもしもの備えに」というテーマで佐那河内婦人会が２千人アンケートを行った結果を発表した。研修成果は地域に持ち帰り共有している。私は勝浦町婦人会に所属しているので、勝浦でも女性のための防災学習会を開催した。LP ガス協会の講演や防災グッズの展示、日赤の方に指導いただき救急措置の仕方を学んだり、防災士会の方には、防災スリッパの作り方やロープワーク、安全な避難の仕方等を教えていただいたりした。このような防災学習会は各婦人団体で毎年行われている。

勝浦町でも不登校の子供達が何人かおり、支援するために、地域と繋がっている団体が最近立ち上がった。地域のさまざまな資源を使い、野菜作りやみかん狩りをする体験等を行っている。その団体は松茂町の団体とも繋がり、ネットワークを少しずつ広げているが、まだまだ十分ではないので、体験や学習の機会をもっと広げるために、人的リソースを増やしたいと考えている。私は勝浦の社会教育委員として、このようなところもしっかりと考えていきたいと思う。

馬場委員長　地域での様々な活動を紹介いただいた。婦人会はフットワークが非常に軽いので様々な活動をされている様子が伝わってくる。地域の繋がりづくりにぴったりだと思う。社会教育だけでできることは限られているので、専門的な知識を持った団体や関係機関と連携しながらフットワーク軽く地域の課題を解決していくことが今後ますます求められると思う。婦人会ならではの横の繋がりを活かしながら社会の多様な課題を解決に取り組んでいただきたい。

泉委員　私達の団体は「ICT を活用して働く」ことをめざす講座を１０年近くやってきている。当初は子育て世代を対象としていたので、受講者は子育て世代が多かったのだが、近年は性別や年齢は関係なく全ての世代の方々を対象に「働き

続けられるスキルやマインド」を学び身につける講座を実施している。

近年はシニアの方々の参加が増えてきている。コロナ禍を経て変化を感じることがある。コロナ以前は、参加される方の目標、言い換えれば、「修了後、自分がどうなっていたいか」というところが、あまり明確ではない方が多かった。「学んで少し何か得られたらいい。」「お仕事があればいい。」「子育てが終わったら働くために少し学ぼうか。」というように、ぼんやりとしたイメージを持った方が多かったが、コロナ禍を経て子育て世代の方もシニアの方も「学んだ後の自分の姿」を明確に持って参加されていると感じている。

特に子育て世代の方は、状況も様々で、例えば、不登校の子供がいるので家で仕事をしたいという状況の方であったり、障がいのある子供のサポートのため、将来在宅で勤務できるようにしておきたいという方がいたり、ICT を活用した自分自身の働き方の具体像を持って参加されるケースが増えている。

また、６０～７０代のシニアの方が受講している。ほとんどが ICT に不慣れな世代の方だが、体が不自由になっても在宅なら仕事ができる可能性があるとお考えの方や、生涯現役で仕事をしたいから在宅ワークのスキルを身につけたいと考える方もいる。講座はオンラインとオンデマンドのどちらでも選択できるようにしているが、７０代の男性受講者の方は、小松島市から私たちのセンターのある鮎喰までバスと電車を乗り継いで毎回お越しになる。ご自宅は ICT 環境も整っているが、やはり直ぐに聞ける状況にいたいという事で、毎回センターで受講されている。こういう方を見ていると、高齢者の方には対面でのコミュニケーションや学びの場というのが必要だと思う。

また、公民館のような継続的な地域での学びの場があれば、例えば、私達のところに来ていただいている高齢者の方が地域に帰り、その地域の学びの中心的な役割を担ってくれるかもしれない。そのような観点からも公民館の役割は非常に大きいと思っている。公民館に Wi-Fi を整備するには財源も必要、簡単にはいかないことだと思うが、やはり必要なハードの整備がされて、良質なソフトが乗ってくるというふうに進んでいかなければならないのではないか。例えば、総務省の予算を活用して、是非、地域の公民館に Wi-Fi の設備を整えていただければ、そこが地域の中心、地域の学びの中心となるのではないか。やはり公民館を積極的な学びの場とするために、まずは設備の充実というものをしていく必要があると思っている。

馬場委員長　大変貴重な御意見である。コロナを経験して学び方も変わってきているし、働き方も大きく変わってきている。それは日々痛感するところでもある。元々公民館は学ぶことが好きな方が集う場であるものの、個人の「学び」で止まってしまっていた。自分の中に学んだ成果を溜めておくのではなく、他の人に働きかけたらもっと社会は良くなっていくというところまで進んでいないという状況だったと思う。そういった意味で学び方もただ学ぶのではなく、それをどう活かしていくかということを含めて、学び方の大きな変革が生まれているとつくづく痛感している。

働き方についても、私の友人もコロナ以前は会社に通っていたが、今は１日

も会社に出なくていいという働き方になっている。そんな社会変化に先んじて、今や子供達の方が ICT に関する知識スキルの扱いが進んでいる。学校は Wi-Fi 環境が整っていると思うので、例えば、高校生が地域の高齢者にデジタルに関する知識スキルを指導してあげて一緒に学ぶという環境があってもいいのではないかと思う。学校の統廃合があったところは Wi-Fi も整備されていると思うので、そういうところを利用するのも１つの地域活性化の在り方かと思ったりする。全国的に見ても、残念ながら公民館は Wi-Fi の状況が全然良くないが、その整備等にどれだけ予算をかけられるかが、今後の大事な課題だと思う。

伊藤委員　徳島県公民館連絡協議会の副会長ということで、委員を仰せつかっている。公民館の Wi-Fi 設備や情報機能の脆弱性については、第１回会議でも話題に上ったところであり、もちろん日々感じているところでもあったので、前回の会議終了後、直ぐに教育委員会の担当課に行き、協議のあらましや、公民館の現状を伝えた。鴨島公民館でも ICT 環境の整備は必須であり、研修等で利用する団体も不便を抱えているので、早く解決できるように、市でも環境整備の予算化に尽力してほしい旨を伝えてきたところである。すぐに予算化することは難しいと思うが、継続して必要性を訴えていかなければ変わらない。ICT 環境の整備は喫緊の課題でもあるので、早期の対応を依頼してきたところである。私自身、市の教育委員会に勤務した経験があるので、その内情も分かっているが、今、社会教育にかける予算が縮小していると感じる。社会教育に関する予算の確保という点についても、担当者としてしっかりと対策を考えていきたいと日々感じている。

また、１０月に広島で開催された公民館研究集会に助言者として出席してきた。「地域と学校との連携協働」という分科会で、他県の取組の発表に対して感想や意見を少し述べさせていただいた。２つの事例発表があり、１つは「若者の発想を生かした町づくり」についてである。コミュニティセンターや公民館を核として、地域学校協働活動の中で子供の居場所づくりを進めているという発表であり、保護者の声等を基に高校生や大学生が関わりながら場づくりを行っているという点が興味深く、学校運営協議会の活性化という視点からも素晴らしい取組だと思った。

もう１つは、「過疎の町を元気に」というテーマで、正に地域と学校が一体化した取組の発表があった。残念ながら数年後にその学校は閉校になるという話であったが、地域と学校との密接な繋がりを生み出す取組が成されていると感じた。私も学校長の経験があるが、発表にあるように、ここまで公民館や地域への働きかけが出来ていただろうかというのが正直なところである。地域の力を利用して子供達の成長を支援する取組が求められているのに、学校の中のことばかりに目が向いてしまって十分ではなかったという反省がある。今、徳島のコミュニティ・スクールの取組を見ても、この２本の発表ほど密接に連携をしている取組は、まだまだ少ないように感じる。先般、飯尾敷地小学校で学校運営協議会が中心となり、学校支援を行っていくということが新聞に

も取り上げられていたと思う。これからの学校と地域の連携の形として、教員だけではできないところを学校運営協議会や地域が応援していくということが必要だと思った。先程、委員長もおっしゃったように徳島市においては、公民館がコミュニティセンター化しており、公民館の機能はどう果たされているのかという点が気になっている。他の町のことであるので、勝手なことは言えないが、公民館は社会教育の拠点であり、生涯学習講座や各種教室、イベント等を催しながら地域の賑わいづくりも含めて、市民が喜ぶ公民館づくりをしていかなければならないと思う。コミュニティセンター化していくことで、社会教育の機能が薄れるのではないかと危惧している。

私が勤めている鴨島公民館は市の指定管理者制度を取り入れており、１８年目になる。建設会社である松島組が指定管理を請け負っていることから、私は公民館長をしているが、松島組の社員の１人でもある。指定管理というのは、市町の行政だけではできない取組、民間の発想を生かした運営ができるということで、予算を有効に使ったり、独自の発想を生かして運営が出来たりする面白さがある。コロナ禍で停滞した部分はあるが、本年度は約５０の生涯学習講座や子供達を対象とした教室も含めて展開している。泊委員さんには、「優しい経済」の講師をお引き受けいただいていることを始めとして、様々な団体等の方を講師に迎えて講座を開設している。大部分の方にボランティア講師でやっていただいており、その費用を子供達の教室に還元するとかイベントで活用する等して取り組んでいる。これまで、なかなかイベントが出来なかったが、今年度は、先般、「昭和の歌コンサート」を開催した。３００人を超える方がホールに集まり、昭和の歌を懐かしがってくれたり、皆が写真を見て喜んでくれたりという姿が戻ってきたことは大きな喜びであった。

NHK の公開番組をやってみたことで、地域にたくさんの方が来てくれたことや、子供向けの教室として書道や絵画ポスター、陶芸教室も開講し、子供達の笑顔をたくさん見られたというのも喜びであった。

また、毎年アンケートを実施して、市民がどのような講座を希望しているのかということを私達は調査しており、その声を生かし、今年度は新たに韓国語の教室を開いた。書道がしたいという声、絵を描く教室に参加したいという声、ハーモニカを習いたいという声等にも対応し、各種教室を開講している。市民ニーズに応じた活動、学びを支援する講師を私達が探して準備することで非常に出席率のいい講座が生まれている。やはり生涯学習に求めている意気込みが表れているのではないかと思う。ただ、参加者の年齢層はシルバー世代であることは否めない。そこが１つの課題。昼間に働いている人向けの講座を作開設して欲しいという意見は当然ある。土曜日にヨガの講座をしたり料理教室をしたり工夫はしているものの、なかなか十分にカバーしきれていない現状がある。あらゆる年齢層の方が学べる機会を提供できるよう考えていかなければならないことはもちろんだが、時代の変化に対応するという点からの講座開設も必要だと考えている。スマホやパソコン教室をやって欲しいという声も多いが、なかなか全てを請け負うことが難しい。しかし、スマホ教室については鴨

島中央テレビに協力依頼して今年、開設することができた。ニーズに対して少しずつ対応しているが、幅広い分野の学習という点では、まだまだだと思う。学んだことを次の活動につなげていくということと、人と人をつなぎ、地域社会に学んだことを還元できる環境整備は必須だと思っているので、時代の変化に対応した学びと活動の循環というところが、今後の課題だと思っている。

馬場委員長　貴重な取組事例を御紹介いただいた。指定管理制度というのは賛否両論あるところだが、上手く活用できれば、行政の固いイメージから脱却してより柔軟に教育の場を提供できる。そういう意味では、そこで働く人の意識が一番大事だと思う。伊藤委員のような方が公民館にいらっしゃれば変わるのだろうと思うところである。少し質問させていただきたい。様々な講座を開講する場合、その指導者全てが公民館にいらっしゃらないと思うが、その場合、地域の人が講師を務めることになるのかお教えいただきたい。

伊藤委員　公民館の職員も生涯学習講座の講師を担当するが、吉野川市内や鴨島町内から専門的な力を持たれている方を選んだり、その他の市町や財務や環境等の関係機関の方をこちらで選出したり、私共で情報収集をして指導者になっていただく方に依頼している。

馬場委員長　地域との連携が良く出来ておられて、素晴らしい。是非、徳島市にもいて欲しいと思う。このような取組が広がれば徳島の公民館も活発化していくのではないかと思う。頑張って広げていただきたい。

榎本委員　私自身は介護福祉士として２０年以上、障がい者の方や御高齢者の方々の支援をさせていただいている。人づくりや地域づくりは福祉に通ずるものがあると思っている。２０年以上現場を見て、皆様の人生の旅路に寄り添いながら行き着いた私の課題として、「共生社会の実現」というところに重きを置いて活動している。時代と共に進化してきているというところで、色々な IT を活用しながら共に生きるというところに重点を置いて取り組んでいる。その中の１つとして OriHime というロボットを採用して、遠隔操作をしながら仕事をし、コミュニケーションを図ることができるという取組を、四国初で行っている。

今日の会議の後、現地研修で OriHime を見ていただくが、現在、吉野川市の就労支援事業所から遠隔でメンバーが OriHime を操作し、カフェで接客をしている。四国初の OriHime パイロットが誕生している。この仕組みを活用すれば、北海道から鹿児島まで、寝たきりの方がベッド上から接客できる。引きこもりの方々やインバウンドの方、世界から日本に入ってきて接客をするという働き方や暮らし方が可能であり、コミュニティーの在り方も変わってくる。このようなことを、四国徳島から発信をしている。ハード面はもちろんだが心のバリアフリーについても取り組んでいる。障がい者や高齢者の方々だけではなく、私達誰もが目には見えない生きにくさを抱えて生きている。だからこそ、カフェを通してバリアフリーを実感してもらえるような取組をしている。また、徳島商業の１～２年生に向けて、教室に OriHime を持っていき出前授業を行った。先程から話題に上っている不登校に関しても、もしクラスメイトが不登校になった時にどういう関り方が可能であるのか、クラスの皆と同じ時間を

どうすれば共有できるのかということなども OriHime と生徒が一緒に意見を出し合った。

教育や防災に関しても、地域が主体となってできることがあるのではないか。誰一人、社会に取り残さないようにするため、福祉や教育と連動しながら、子供達が自分の事を発信・発言できる環境や場所を、私達大人が作っていかなければならないと思う。

防災に関しても、今後、四国に震災が起きると言われている。発災後は、第一避難所、第二避難所が作られるが、障がいのある方のパニックを落ち着かせることはもちろん、御高齢の方や認知症の方を含めて落ち着く場所として、第二避難所には必ずスヌーズレンルームを作ることが必要だと考えている。

そして、これまでの福祉の経験を通して得たノウハウを教育に落とし込んでいけるような活動をしたいと思っている。

また、地域住民が主役となるビジネスを作り、その売り上げた金額を減税や地域に還元するような仕組み作りができれば、地域住民の生きがいにもなるのではないだろうか。子供達のアイデアが実現し、大人達が挑戦する場所や機会があるということは地域づくりを進める上で重要なポイントだと思う。

その好事例として、石川県のある法人を紹介したい。地域住民や学生ボランティアが温泉運営に参加している。学生ボランティアの活動は単位認定に繋がっており、地域での活動の経験を積みながら単位取得ができる仕組みがある。住民同士も「顔の見える関係」づくりができており、町おこしの成功事例となっている。この事例からも分かるように、地方格差なくアイデアを行動に移すことができれば、徳島にも成功事例を実現できると思い挑戦している。

馬場委員長　福祉と教育の連携は大事だということを痛感している。この前、島根県の益田市の小学校を訪問した。非常に児童数が少ないのに特別支援が必要な児童が複数人いるという中で、今の学校が抱える様々な課題があった。一人一人の児童への支援に加え、多種多様な学校の課題を解決しながら、子供を教え導くには、これからは地域住民の力を借りながら進めていかなければ難しい問題だ。教育と福祉との連携は必須であり、一人一人がそのことを自覚することが非常に大事になってくると思う。

蟹江委員　徳島県 PTA 連合会副会長という立場で参加させていただいている。コロナ禍の間は PTA 活動も思うように出来なかったが、今年度は会長指導者研修会を久しぶりに対面で実施できた。また、各郡市 PTA 連合会でもそれぞれに家庭教育研修会を行い、色々なことを学ぶ機会が増えてきており、それが社会教育の場だと感じている。一方で、研修等に参加して学んだことを持ち帰り、それぞれの学校の保護者の方に伝えるこの難しさも痛感している。効果的な周知の方法も私達 PTA で活動する者が考えていかなければならないと思っている。

先程、コミュニティ・スクールの中身が伴っているのかどうかという御指摘があった。小中学校のコミュニティ・スクールに委員として参加しているが、こちらから提案しても、学校側や保護者の方々が多忙で受け入れられる余裕が

ないのではと感じることが多い。また、学校からの報告を聞くだけでディスカッションを行えていないコミュニティ・スクールもあると聞くので、改善の余地があると思う。さらに、部活動の地域移行が進んでいくと思う。外部の指導者に部活動の指導を協力していただくと思うが、指導者が地域にどれだけいるのか。地域によって格差があるのではないかというところを徳島県 PTA 連合会でも不安に感じている。不平等なく地域人材を確保していくということは、社会教育にも関わることではないかと考えている。

今夏に日本 PTA 広島大会で不登校に関する分科会が開催された。広島県の事例を紹介させていただきたい。学校内にスペシャルサポートルームという不登校支援の教室を開設しており、そこでは不登校の子供達の状況に合わせた登校時間や、他の生徒とは別の下駄箱・入り口を設けているほか、スペシャルサポートルームの生徒達が提案したスポーツ大会を学校全体で取り組む等、色々な支援をしている。また、地域の方の協力の下、スペシャルサポートルームの子供達が野菜を栽培しているということも報告されていたので、社会教育委員の人達で支えて不登校の子供達の支援もできるのではないかと思った。不登校の子供達もいずれは社会に出る。それまで心の元気度が溜まるまで大人はきちんと見守ることが大事だということを広島の発表から学んだ。我が家の娘の通う学校にも不登校の生徒がいるが、そういう子供や保護者にも寄り添うことが出来たらいいと思った。私には高校生の子供がいて色々な地域に出る事が多くなったのだが、鳴門にはホールが整備された大きな公民館はないので、公民館の規模が地域によりだいぶ違うことに驚いている。

馬場委員長　PTA の役割が非常に大事になってくると思った。子供の発想を大人がどう取り上げて広げていけるのか、社会教育の重要な出番ではないかと感じた。

横田委員　委員さんの話を聞いて、学校としては心強いと感じた。色々な方々が学校を支えてくれようとしていらっしゃる現実が非常に嬉しいと思っている。私もこの職に就いて３０年過ぎとなるが、初任の頃はここまで地域の方々に学校に関わっていただくことは無かったと思う。特にコミュニティ・スクールの導入は一種の節目ではなかったかと考えている。コミュニティ・スクールの話が最初に出た時には懐疑的な面もあったが、委員の方々が来校され多様な視点から建設的な意見を言ってくださることが本当にありがたく感じる。これまで赴任した学校では、行く先々で、子供達に何ができるのか一生懸命に考えてくださる委員さんに恵まれた。現在の学校でもコミュニティ・スクールの会議を６月に実施したところであるが、有意義な意見をたくさんいただいた。本校は徳島県では唯一の中等教育学校であるので、県内では参考にする事例を見つけることが難しいのが悩みであった。コミュニティ・スクールの委員から、県外視察に行ったらいいのではないかという意見をいただき、これまで以上に多くの事例を視察にいくことができた。また、今年度は、ある企業の助成をいただいたことで、教職員の視察のための旅費を担保できた。これまで 20 名ほどが県外の中等教育学校の視察をすることができた。京都の堀川高校や神戸大学の付属中等教育学校。広島県の中等教育学校等を訪問し、特色ある教育活動を実践され

ておられる先生方にお話を伺ったり、授業を見させていただいたりした。視察先から持ち帰った情報や体験を教員同士で共有し、「〇〇の教育活動を取り入れよう」「〇〇の仕組みをアレンジしてみては？」といった活発な協議も行われ、特色ある学校づくりが進み出していると感じている。コミュニティ・スクールの役割は非常に大きい。１２月に第２回の会議を開催予定であるが、その時に視察結果について、各委員に報告したいと思っている。また、今年度初めて小学生の体験入学も行ったのだが、体験入学の在り方についても、非常に素晴らしい意見をいただいているので、来年に向けて準備を進めていこうと考えている。

地域の方々は、学校のために考え活動くださっている。実際に謝金等をお支払いできれば、もっと様々な方に関わっていただけるのではないかと常々思っている。本校は、徳島市内の学校で地域と繋がる難しさというところもあるが、地域の方々が学校を気にかけて前向きな意見を提案してくださるのが、非常にありがたく、それらが総合的な探究の時間に活きていると思う。以前に比べ、学校は地域に支えていただかないと前に進まない時代が来ているということを、教員方も分かっていると思う。学校と地域の連携協働が円滑に進むよう、行政としてのシステムづくりを期待したい。

馬場委員長　コミュニティ・スクールは形を作ることから始まるのが一般的。中身を充実させるには、地域住民の皆さんにも頑張っていただかないと上手く機能しないと思う。是非、徳島県内では初めての中等教育学校であるので、新しい取組にも積極的に挑戦いただき、５年後の成果を見せていただきたいと思う。

横畠委員　委員の皆様それぞれが非常にクリエイティブでいらっしゃる。地域とつながり多様な取組や改革をしておられる。お話を聞くだけで、とても勉強になり、私自身にも活力が湧いてくるように感じる。私も中学校長として、現場を預かり学校経営を行っているので、持続できるものを作っていかなければならないと強く思っている。本校も今年度から本格的にコミュニティ・スクールをスタートしたが、委員からは「地域学校協働活動の一体的推進」ということが分かりにくいという御意見をいただき、共通理解を図るため４回ほど会を開いた。学校コーディネーターの方も頻繁に来てくださるので、意見交換もしっかりと行えている。「いつでもオープンスクール」という合言葉を実践しているので、地域の方がいろいろな形でやってきてくれる。本当に支えてもらっているところである。本校ではキャリア教育に注力している。８事業所９人の方にブースを作っていただき、子供達がブースを回り職業の話を聞かせていただいた。

例えば、穴吹高校と連携して地域で「茶育」に取り組んでおられる地域の方が、５年前の茶葉を使って子供達に習字を教えたり、地域の饅頭屋の店長が接客の難しさや工場の在り方について話してくださったりした。また、人工透析を専門にサポートする看護師の方が、透析用の針を見せながら人の命を助けることの尊さを子供達に語ってくださった。コーディネーターさんやコミュニティ・スクールの委員の方が、穴吹中学校を卒業し、穴吹を中心に活躍してい

る方々を講師としてマッチングしてくださったので、子供達は本当にいい経験をさせていただいた。講師のお一人が、生徒達に、来たるべき自分の進路決定に向けて、それに見合う体力や知力を備えておけるよう今から準備していく必要があると語ってくださった。このように、地域の大人達が総掛かりで子供達を応援し支えてくださっていることは、本当にありがたい。その後も様々な職種の方々が工夫を凝らしキャリアに関する説明をしてくださったが、その後の反省会でコミュニティ・スクールの委員の方から持続可能な取組に向けての方策が必要だという御意見があり、委員の御意見を参考に来年は美馬市に、再来年は徳島市に広げ、４年目はもう一度穴吹町に戻し、循環する仕組を作っていければと考えている。コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の連携の功績を全国の PTA でも表彰していただいている。

それから、私はボランティアで２０年近く合唱団の指導をしている。おそらく、どのような分野でも次世代の人材養成という課題が出てくると思う。私がその合唱団を引き継いだ時は３８歳であったが、地域で若手をどう育成していくかが非常に大きな問題だ。自分が培ったものは社会に還元する時が必ず来るのだという事を幼い時から教えていく事は社会教育の視点からも非常に大事だと思う。本日お越しの委員の皆さんも、これまでの経験を生かし社会に貢献なさっていると思うので、長い道のりかもしれないが、学びや経験を地域に還元することの重要性を若い世代に伝えていかなければと強く思っている。

馬場委員長　大変素晴らしい取組だと思うが、キャリア教育にかかる費用はどのようにしているのか。

横畠委員　ボランティアで引き受けていただいており、地域の方の応援のおかげで成りたっている。

馬場委員長　コミュニティ・スクールも全国的にどんどん増えてはいるが、中身の充実が問題。中身の充実には、関わる方々の理解は欠かせない。中には、地域に関してあまり関心を持っていない方々もいる。そういった方々の理解も含めて素晴らしい事例をオープンにして発信していくことが大事だと考える。

各委員から貴重な御意見をたくさんいただいたき感謝している。これをもって、本日の会議は終了とする。